

○議長（茅沼隆文）

引き続き、一般質問を行います。

それでは、2番、山田貴弘議員、どうぞ。

○2番（山田貴弘）

皆様、こんにちは。2番議員、山田貴弘です。

先に通告いたしました1項目の時代の変化を捉えたイベント（仕掛け）の企画をについて、質問させていただきます。

町（実行委員会形式を含む）が開催する各種イベントのあり方について、内容、運営方法にさらなる変化を求める声が町民から上がっています。イベントを実施するにあたり、地域や産業の発展、町の経済効果につながっているのか、観光振興の充実、歴史・芸術・文化の伝承、魅力の発信ができていているのか、地域振興、町民総参加のもとに町民の触れ合い、魅力、個性の創出の場になっているのか、定住・企業誘致促進、広く町外に向けて発信ができていているのか等、効果、意義の検証を行い、企画、実施の充実を図る必要があります。

そこで、次の項目について質問をしたいと思います。1、各種イベント実施に伴い、来客数、出店ブース売り上げの推移状況、及び来客者の特徴、性別、年齢3区分、外国人、交通手段、情報発信元等の分析を。2、福祉・防犯・防災事業を内容に盛り込んだイベントの構築を。3、あじさいまつりについて、岡野あじさいの里会場にあじさいの里と違った付加価値の創造、年間を通じた観光客の流入を。4、阿波おどりについて、足柄紫水大橋をメイン会場とし、よさこい踊り（大井町）、阿波おどり（開成町）の踊りの広域交流を促進しては。5、ひなまつりについて、文教行事の一環として日本の節句の意義伝承の充実を。6、町防災訓練のマンネリ化を防ぐために充実した企画を。

以上、登壇からの質問とさせていただきます。よろしくお願いします。

○議長（茅沼隆文）

町長。

○町長（府川裕一）

それでは、山田議員の御質問にお答えをいたします。

時代の変化を捉えたイベントの企画についてであります。はじめに、各種イベント実施に伴い、来客数、出店ブース売り上げの推移状況、及び来客者の特徴、性別、年齢3区分、外国人、交通手段、情報発信元等の分析をについて、お答えをいたします。

あじさいまつりでは、中学生、小学生の協力によりアンケートを実施し、年代、性別、居住地域、きっかけ、交通手段、消費額、情報入手手段などを調査し、その結果を実行委員会に報告し、次の開催の事業計画の参考としております。外国人に特化した分析は、特に行ってはおおりません。昨今の新たな観光ビジョンであるインバウンドの推進の観点から、今後は内容に盛り込んでいくことも検討する必要があります。また、出店者アンケートも実施をしてまいりたいと思います。

次に、福祉・防犯・防災事業を盛り込んだイベントの構築について、お答えをいたします。

開成町の三大祭りであるあじさいまつり、阿波おどり、ひなまつりでは、授乳室、障がい者団体の出店、防犯パトロールなど、団体と調整し、協力をいただき実施しております。さらなる内容の充実は、所管課だけではなく関係課、関係団体の協力をいただきながら進めることが必要と考えますが、実行委員会にきちんと伝えていきたいと思っております。

毎年、あじさいまつりにおいては、町内の福祉団体の皆さんが、あじさいの里内の親しみ広場でバザーや物品の販売を行っております。あじさいまつりの際に、開成町商工振興会が販売をしている「開運かざぐるま」の作成については、町内の障がい者施設の皆さんが組み立てに携わっております。また、あじさいまつりの開園式の際には、手話通訳者を配置し、障がいをお持ちの方にもお楽しみいただけるようにしております。

阿波おどりでは、高齢者や障がい者などの福祉対象者の方を御招待し、役場会場に福祉席を設けて踊りを楽しんでいただいております。

三つ目の質問、あじさいまつりについて、岡野あじさいの里会場にあじさいの里と違った付加価値の創造、年間を通じた観光客の流入について、お答えをいたします。

岡野あじさいの里のあじさいは、地域の方の手入れにより、あじさいの里のあじさいよりきれいに咲いているところもあり、問い合わせに対しても写真撮影スポットとしてPRを行っております。また、チラシにも岡野あじさいの里や瀬戸屋敷などの周遊コースの記載やスタンプラリーの実施など、岡野方面をはじめ北部地域への集客を図っております。今後、点での移動になっている人の移動を面にしていくための方策について、実行委員会と調整しながら検討してまいりたいと思っております。

四つ目の御質問、阿波おどりについて、足柄紫水大橋をメイン会場とし、よさこい踊り、阿波おどりの踊りの交流拠点を促進してはについて、お答えをいたします。

阿波おどりについては、開成町商工振興会や飲食店組合などの町商工の振興を図るとともに、観光資源としての活用を図ることを目的として開催をしております。大井町よさこいまつりも商工振興を目的としているとは思いますが、開催時期、交通規制等、多くの調整が必要などの問題があります。これらのお祭りは、それぞれに地域性を持っていることもあり、現在のところ交流開催は考えておりませんが、これらの提案については連協会及び実行委員会にも伝えていきたいと考えております。

五つ目の御質問、ひなまつりについて、文教行事の一環として、日本の節句の意義伝承の充実をについて、お答えをいたします。

ひなまつりは、唯一、町補助金を受けずに開成町瀬戸屋敷ひなまつり実行委員会が主催をし、開催をしております。これまで開成幼稚園児や酒田保育園児が瀬戸屋敷へ来園し、見学や催しに参加もしております。なお、節句などの行事を伝えていくことについては、町文化財保護委員会の編集による「開成町の年中行事」という冊子が近く発刊の運びとなっております。この冊子には、節句行事としての「ひなまつり」の

意味にあわせて、瀬戸屋敷で開催される「ひなまつり」についても紹介がされております。

次に、六つ目の町防災訓練のマンネリ化を防ぐために充実した企画をについて、お答えをいたします。

開成町が実施する町防災訓練は、関係機関とも連携した年1回の貴重な震災対応型の訓練の場であります。イベントとしては捉えておりません。防災訓練の内容としては、自助、共助を柱とした各自主防災会が主体となって実施する地区防災訓練、町や自衛隊の公助と自主防災会等の共助が連携して実施する広域避難所開設訓練、各種協定を締結している企業等と連携した訓練を、防災期間中の日曜日に町内一斉に実施しております。

今年から訓練の地震発生時間を7時45分としておりますが、これは昨年の反省点として地区防災部長からの意見を反映したもので、このことにより、地区で集合するまでの時間を使い、シェイクアウトなど、自助の行動をとる時間として活用することができました。また、新たな取り組みとして、各自主防災会、役場内各班と町防災担当職員及び防災安全専門員とでヒアリングを行い、訓練内容の確認や助言を行うなど充実した訓練内容といたしました。

広域避難所の開設運営訓練は、熊本地震発生以降、その重要性が再認識されており、各地区からの避難者を対象に広域避難所を開設し、地域住民が主体となる形で受け付けから避難スペースの確保、避難所運営委員会の立ち上げを行い、実践に即した内容として実施をし、住民への意識の高揚を図りました。また、一連の避難所開設訓練後には各種機材の操作訓練等行うとともに、今年から趣向を変えて防災知識を養うための訓練も取り入れたところであります。

今後も防災訓練で必要となる基本的な訓練は繰り返し行い、町民への意識づけが必要な知識など新たな要素も取り入れながら、充実した訓練を実施してまいりたいと考えております。

以上であります。よろしくお願いいたします。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

それでは、再質問をさせていただきます。各イベントに参加及び協力をさせていただいている立場として、再質問をさせていただきます。

最初に、なぜイベントを開催するのか、目的が見えなくなっているように感じています。目的をはっきりと認識、周知されていないような状態でイベントが開催されているように思えるのですが、それについての答弁をよろしくお願いします。

○議長（茅沼隆文）

産業振興課長。

○産業振興課長（遠藤孝一）

では、山田議員の質問にお答えさせていただきます。

まず、イベントそのものをなぜ行うのかということでございますけれども、三大祭りの関係でいいますと、まず、あじさいまつり。あじさいまつりについては、そもそもスタートが自治会長を中心にした催しでございました。これに関しては、意識的には地域の醸成といいますか、そういう輪をつくると、おもてなしをもってお祭りを盛り上げてきたという経緯がございます。そんな中から、後から商工振興的なことも位置づけられ、観光の要素が加わってきたと考えてございます。

阿波おどりについてなのですけれども、阿波おどりについては、もともとスタートが商工振興の、もともと開成町商工振興会でやっていただいていた夏祭りのな行事を、だんだん参加人数が少なくなってきたということで、町の提案的なところから盆踊りを切りかえて阿波おどりにしたという経緯がございますので、目的は、あくまでも商工振興という考え方でございます。

ひなまつりについてなのですけれども、これは、もうまさしく婦人会さんの自主事業で盛り上げてきたということで、一切、町の補助金は使っていない優良なお祭りだとは思いますが、これは、あくまでも、言われたとおり、年中行事の浸透をする、あるいは途中から会場を瀬戸屋敷に切りかえてというところがあるので、瀬戸屋敷のPRも含む目的でやっているという考え方でございます。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

ただいま課長から、あじさいまつり、阿波おどり、ひなまつり、三大祭りというものについて、当初の発足のときの経過も含めた中で答弁をいただいたところであります。今回、質問に至った部分で、題目でもあるように時代の変化を捉えたイベント、仕掛けの企画をとということを題目の中で唱えているのですが、やはり昔と今とではイベントの運営自体の内容も変わってきているのではないのかなというところが、日々、参加している中で感じているのです。なぜ、この祭りは、やっているのかなと、最終的に終わった後に疑問が出てくるのです。

どのお祭りでも良いのですけれども、終わった後に、どこの団体が物すごく熱くなって、次のために開成町を盛り上げようじゃないかという、要は上昇志向というのですか、なっているのかなと検証させてもらっているのですけれども、なかなか、そういう団体が見えてこない。単なる、毎回、こなしているように見えてしょうがないのです。やはり、このままいくと。

当初、各種三大イベントをつくったときというのは、イベントに参加している人たちは、みんな若かったのです。元気だったのです。その人たちが中を変わらないで、みんな年をとっていつているのです。果たして、今の現状を続けていつて、このお祭りが良くなっていくのかという。決して今やっているお祭りが悪いからと言っているわけではなくて、将来を見据えたときに、果たして現状のお祭りが維持できているのかという疑問符のところから今回の質問に至っているという。

また、特に町側、運営側を見ていると、これ、先ほど、町長答弁の中では実行委員会という言葉を使って町という表現はされていないのですが、事実上、お祭りを見ていると、町の協力なくしてイベントは成功しないと思っていますので、あえて町側、運営側を見ていると、一生懸命こなそうとするところが見えてくるのです。ただ使命感のみが伝わってきてしまっていて、本来、お祭りが、例えば地域産業の発展を目的とするのであれば、これは商工振興会だと思うのです。地域振興の場合は、これは自治会という部分に当てはめてくると思うのですが、そのほかに前段で観光振興の充実と定住・企業誘致促進というものを、自分が分かる範囲の四つの課題というのですか、目的を述べさせてもらったのですが、何か、お祭りの中にそこら辺のコンセプトが見えないまま、ただ、こなしていると。行政側は使命感に基づいてイベントを成功させることに集中していて、本来の何を目的に、何でお祭りをやるのかというところがなかなか見えてこないという。

そういうことを繰り返してくと、必然的に、皆さん、年をとってきて一人抜け、二人抜けといって、なかなかお祭りが盛り上がっていかないという。だから、まず、その目的部分を整理していかなければいけないのではないのかなと思うのです。また、整理する必要もないと思いますよ。先ほど、自分が四つ上げた目的があるじゃないですか。全て、その四つを制覇した中でお祭りを開催するというのも、これは一つの手だと思うので、あえて一くくりにして地域振興に特化した中でのお祭りを開催しなくてはいけないということもないですけれども、そこら辺の整理の時期に来ているのかなと思うのですが。

特に、あじさいまつりは、自治会長が最初に「やろうじゃないか」という声を上げてやったという。今、現状を見ていて、自治会中心には全く思えないのです。あと、阿波おどりもそうですね。商工振興で、当初は盆踊り。確かに、商店街活性化の意味で過去に盆踊りをやっていて、それが阿波おどりに変わったというのは自分も記憶の中ではあります。しかし、連というものができて、果たして商工振興会が主体としてやるものなのか、連が中心となって阿波おどりを盛り上げるのかという部分の疑問符はあるのですが。

そこら辺の焦点を絞って運用していかないと、せっかく予算投入している中で集中できなくなってくると思うのです。そこを思い切って活性化させるのだよというときに予算投入をしていくというやり方のほうが、有意義ではないのかなという。だからやるのではなくてね。そこら辺の認識は、現状のお祭りを運営していて、当然、感じていると思うのです。皆さん、参加していて。今後、どうしていこう、ああしていこうというのは考えているとは思いますが、どこかで変えていかなくてはいけない部分が出ているのかなと感じているのですが、そこら辺、答弁がありましたら答弁をよろしくお願いします。

○議長（茅沼隆文）

町長。

○町長（府川裕一）

町の大きなイベントとして、ひなまつりとあじさいまつりと阿波おどりについて話をさせてもらいたいと思うのですけれども、それぞれスタートの時点において、いろいろな立ち上がり方があったと思いますけれども、今の現状の中でいけば、ひなまつりは婦人会さんが主体になって。全部、全て町主体ではなくて、実行委員会主体という形に今、三つの事業はなっておりますけれども、ひなまつりにおいては、婦人会さんがひなまつりの主体としてやっている。あじさいまつりは、今は商工振興会さんですよね。阿波おどりは、基本的には連協会がありますので、そこが主体となって中身ほか運営をやって、町はそれを支える事務局として全てかかわってはやっておりますけれども、それぞれきちんと特色を持ってやっているとは私は思っています。

今、年齢的な話がありましたけれども、その時々によって、阿波おどりであっても踊る会場を変えたり、様々な工夫をしながら、変化をしながら今の状況になっていると思いますし、全て、あじさいまつりもそうです、ひなまつりもそうです。その時々状況、また参加している協力団体等も含めてトータルな中で、その時々社会情勢によって、もっとこうしたら良いという提案の中で変化して今があると思っていますので。そういった中で、さらに、その変化をもっともっと元気にしていくためにはどうしたら良いかという中の山田議員の提案だとは思いますが、今、現状認識としては、私はそのように、三つのイベントについては、今、認識をしております。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

ありがとうございます。町長答弁をいただいた中で、やっていないと言っているわけではなくて、今の参加している人たちがこのまま年をとっていくのですよという。要するに、新しい人たちを入れていかなければ、お祭りは変化してもいけないし。単なる町長号令のもとに、イベントの内容を変えながら、目移りするものをアピールしているのだよでは、いけないと思うのです。やはり、ひなまつりのように婦人会さんが主体となって財源を投入しないでやるというのは、これは一番最高のやり方だと思うので、そういう人たちを育てていくという部分では、新しい人たちがどんどん入ってくる環境にしていかななくてはいけないというところが重要なポイントだと思うのです。

その中で、自分もいろいろな立場のある中で、実行委員会も参加させてもらっている中で、近々でいえば、あじさいまつりが終わり花火大会が終わりという経過があるのですが、その中で、これ、実行委員会がやっているのだと言われれば話は終わってしまうのですけれども、その答弁は避けていただきたいのですけれども、要は、目的を達成するために課題の抽出が重要と思うところなのです。要するに、お祭りが終わった後に課題というのは必ず出るはずなのです。こうしよう、ああしよう、こうやっていこう、予算が足りないから、こういうところを来年度は充実しようという、それなりの根拠は出てくるはずなのに、どこで課題抽出をして次のお祭りにつなげているのかというのが、正直言って見えないという。そこら辺のルートをどうとりながら課

題抽出をしているのかというのを、1点、聞いてからにしましょう、次は。よろしくお願いします。

○議長（茅沼隆文）

産業振興課長。

○産業振興課長（遠藤孝一）

祭りが終わった後の課題抽出というところをどうしているかということでございますけれども、基本的に、終わった後にアンケート的なところを、まず。あじさいまつりでしたら、まず、職員がかなり携わっていますので、職員から今年のあじさいまつりについての反省点、あるいは良かったことを抽出してございます。また、自治会長会議等で今年の報告をして、その後、御意見をいただいて、まとめているということをして。そんな中で、あとは、アンケート的なところは、今、町長答弁にもありましたとおり、小・中学生にアンケートをとっていただいて、参加していただいた中の御意見を、また実行委員会の中で報告をして次年度に役立てるというシステムをとってございます。

ほかのイベントについては、ひなまつりについては、ある程度、婦人会さんにお任せのところがありますけれども、指定管理者もかかわっていますので、そちらは指定管理者にアンケートをとっていただいたものを次年度に役立てるということで行っています。

阿波おどりについては、もう、その場で、後日、アンケートをとるようなことはしていませんけれども、一応、三大祭りについてはまとめてございます。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

分かりました。議会に対しても7月20日に、あじさいまつりについて、今年の評価と次回に向けた課題等ということでA4の1枚の両面刷りで報告をいただいているところで、これはこれでデータとして見させてもらっているのですが、そこら辺の課題抽出というところを考えると、もう少し丁寧にやるべきではないのかなと思うところなのです。

実行委員会形式として捉えているのであれば、最低限度、実行委員会を終了後に開いて、そこから課題を見出すというのも一つの手だと思うのです。なかなか、その関係している人たちは忙しいからというのもあって配慮しているのだとは思いますが、そうは言っても、その関係者の人たちも各種団体の中ではそれなりに代表という立場の中で、やはり、その産業の発展を、また、各、阿波おどりでいえば連とか、そういうところの反映とか、そういうものを望んでいる代表の方が来ていると思うのです。そういうところと懇談をしながら、良いものをつくっていけば良いのではないのかなと感じているところなのですが。

いろいろな、みんな、提案を持っていて、企画を持っているのです。ただ、そうい

う場がなく、思ったときには、もう次の年度の内容が決まってしまう状態、行政側から言われるのは「予算がないから無理です」という。もう、これで決まっていますという。そういう内容のぶつけ合いをしていると、やる気のある人は「ああ、じゃあ、いいや」という状態になって、言いたくても言えない状況があるのではないのかなと感じているところなので、ぜひとも、その部分は。

行政側で全て企画を出してイベントを持ってくれということを行っているのではなくて、そういうところを皆さんから声をいただいて、ああ、そういうイベントのやり方もあるのだな、そういう企画もあるのだなということで取り入れていく方法をとっていかないと、人材も不足していく中で衰退していくのかなと感じているところなのです。

自分もいろいろな企画を提案する中でアイデアはいろいろとあるので、常に産業振興課とは、こうやってみようよ、ああやってみようよというのでは、やってはいるところなのですが。一例を挙げてみると、あじさいまつりでいえば、例年、今回は31回だったのですね。今までの観光客数を見ると、31回については前年を割ってしまったという結果が出ているという。その中で、仮に、実行委員会もしくは何か意見はないですかといったときに、簡単に提案できるのです。

例えば、6月11日に雨が降って、通常は4万人、2万人、1万人という来客数がある中に、11日だけは2,000人、15日は5,000人という。これは、雨の影響で人数が減ったという。そういうことを報告いただいているところなのですが、例えば、雨の日は駐車場を無料にしますよとか、そんなのをちょっと入れながら雨の日に観光客を入れるのも一つの手だと思うのです。

これ、なかなか行政側から言うというのは言いづらい部分もあると思うので、そういう実行委員会形式にしているのであれば、反省のもとに、そういうものが生まれてくると思うので、ぜひ、そこら辺は反省を含めた中でやっていっていただきたいと思うのですが、その点については今後の課題だと思うので、検討しますとか、そういうのになってくると思うのですが。

一つ気になったのが、全協で配られた資料、報告の中で気になったのが、瀬戸屋敷の来園者数というのは町民が前年よりも下がっているじゃないですか、数字的に。これはなぜなのかというのが聞きたいのと、あと関係者が3倍以上表記されて、目標数字というのですか、それをこなしている部分があるのですけれども、ここら辺、捉え方が分からなかったので教えていただきたいと思います。

○議長（茅沼隆文）

産業振興課長。

○産業振興課長（遠藤孝一）

瀬戸屋敷の人数が下がるというのが具体的にどういう現象で起こったのかというのは、ちょっと実証的にはできないのですけれども、近隣の方の入場者数が下がってしまったのか、外部から来た人が根本的に少なかったのか、その内訳はちょっと分かっていますけれども、その辺は今後、具体的に、その理由については探っていくた

いと思います。

関係者がという話ですけれども、ここについても、その要因については具体的に分かりませんので、もうちょっと詰めて調べてみたいと思います。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

質問の中でも、質問の1ですね、各種イベント実施に伴い数々のデータを調査してください、分析をしてくださいということを述べているのですが、そういうデータをもとに、今、こういう志向になっているのだとかというのを、できれば、欲をいえば、実績ベースで反省で次にこなすのではなくて、行政側はいろいろなデータとかいろいろな知識を持たれている方が我々民間人よりも多いと思うので、ぜひとも、それは察知した中で、今年度はこんな状況になるというのを読みができると思うので、そこは。情報として提供すれば、いろいろなイベントがこなせると思うので、ぜひ、そこら辺は仕掛けていつていただきたいなと思います。

それと、あと瀬戸屋敷の観点でいくと、質問をちょっと変えますけれども、瀬戸屋敷関係でひなまつりの部分では、先ほど、言ったように自主財源のもとにお祭りを開催、成果を上げているという報告がされている中で、これは大変評価はするのですが、その一方、瀬戸屋敷は観光振興拠点、町民学習拠点、地域活性化拠点等、施設の設置条例の目的を果たす内容が拠点として定められているのですが、ここら辺を意識した中で。ある程度、お祭りをやるときに、ひなまつりをやるだけではなくて、5番目に言っている、ひなまつりについて文教行事の一環として日本の節句の意義伝承の充実をとということを質問させていただいているのですが、瀬戸屋敷そのものの目的があるじゃないですか。やはり、それは、お祭りをやるについては、今、三つ上げたものを意識した中で見せていかなくてはいけないのかなと思っているのですけれども。

最初のうちは良いですよ、それは。ある程度、特化した中で、ひなまつり、おひなさんを見せるのだ、見せるのだでも良いのですけれども、年々こなすごとに本来のあべき瀬戸屋敷のあり方というものに戻って意義を伝えていかないと、あそこはお祭りの場ではないというスタートだったと思うので、そこら辺は、そこら辺の部分、三つ、今、述べた部分を入れた中でお祭りの充実をしていくべきではないのかなと思うのですが。

そこら辺、自分の考え方がおかしいというのであれば言っていて、助言をいただきたいとは思いますが、率直に自分は感じる。今のひなまつりのあり方というものを、もうちょっと教育目線の中でやっていくべきではないのかなと感じているのですが、その点について答弁をよろしくお願いします。

○議長（茅沼隆文）

産業振興課長。

○産業振興課長（遠藤孝一）

では、今の質問にお答えさせていただきます。

ひなまつり、いわゆる年中行事の中の一つとしては、婦人会さんがひなまつりに特化して、そこを盛り上げていくということでひなまつりを行っていますけれども、議員御指摘のところは、瀬戸屋敷でやっている意義、瀬戸屋敷ひなまつりのところを、ただお祭りをやって過ぎているのではないかということの御指摘だと思います。

その中で、瀬戸屋敷でひなまつりをやるということの意義は、町長答弁にもありましたとおり、文化財保護委員さんが盛り上げてくれている、そういう年中行事の意義というところを考えますと、瀬戸屋敷クラブというクラブがありますが、そちらは年中行事ということで年間、お正月行事から年末のお正月準備までということで、途中、いろいろやっていただいていますけれども、そのPRというか、瀬戸屋敷で何をやっているというところのPRがいまいち不足しているのかなという御指摘であろうかと思いますので、その辺を、ただホームページに載せるということだけでなく、今後、どのようにその辺の意義を伝えるかということは研究してまいりたいと思います。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

要するに、ひなまつり、今やっていることが全くだめだと言っているわけではないのですよ。これを前提に考えていただきたいのですが、どうせやるならという中に、レベルアップを今後、図っていただくという部分で、先ほど、上げた三つの要素をつけ足した中でお祭りを開催すれば、もっと充実したものができるのではないのかなという提案であります。今後、取り入れていく形の中で組み立てをしていただきたいと思います。

瀬戸屋敷というと、北部の部分が強いじゃないですか。そういう部分で、一つ、企画の提案というか、イベントの開催ができるのではないかとということで提案したいのですが、8月27日、先月のこと、新横浜にグルメタワーというGEMS新横浜がオープンしました。これは契約農家、開成町のお米を使ったメニューを提供しています。GEMS新横浜は「10の美味しいが輝く新横浜のグルメタワー」をコンセプトにお客様の集客を図っているということで、情報を持っておられる方もいるとは思いますが、これが8月27日に横浜にオープンしました。これ、あくまで開成町の契約農家さんのお米を使ったメニューを提供しています。これは、先ほど、言ったように新横浜でオープンしていますので、仮に情報がないのであれば調べていただきたいと思います。

また、そのほかにもチェーン店でおなじみの牛角などが開成町のお米を提供している実態というか、状況があるというのは、これは知っておられるとは思いますが、ここで言う、お米を提供している実態がある中で、グルメ、お米をテーマにしたイベントの開催が一つできると思うのです。これは、お米だけでイベントを開催しろというのではなくて、何かのイベントに盛り込んでいって、要は、契約農家の方のお米がこれだけおいしくて、横浜でもこういう形の中で提供されているのだよというような

啓発をしていけば。ある意味、逆輸入ですよ。本来は開成から「おいしいんだよ」と発信しなくてはいけないものを、もう既に事例があって提供されているという。

逆に言えば、町民からしてみれば、ああ、そんなに開成町のお米はおいしかったのと。要するに、自家消費の部分がイベントをやることによって見直しされるということで、どこどこのお米がおいしいからとスーパーへ行って買うのではなくて、地元の農家さんからお米を買ってあげるという仕組みが必然的に、お祭りを開催して、そういうことをアピールすることによって、本来、知らなくてはいけない地元が知っていくという。やはり、それも企画の一つだと思うのです。そういうことも、やはり知らないで提案ができないし、そういう場の発言する場がなければ、これは実行にもならないと思うのです。だから、ぜひとも、そこら辺は門戸を開いた中で仕掛けづくりというものをしていっていただきたいと思うのですが。

今、これ、2点、既に開成町のお米を使った中で商業ベースにもう乗っているのですけれども、ここら辺を行政側はちゃんと把握をしていたのかどうか、そこがまずは問題だと思うので、そこら辺、答弁をよろしくお願いします。

○議長（茅沼隆文）

産業振興課長。

○産業振興課長（遠藤孝一）

今、言われた8月27日に新横浜でグルメタワーで云々というのは、申しわけございません、存じておりませんでした。牛角の話は、聞いているところでございます。

今、御提案のありましたお米をテーマにというのは、一例だとは思いますが、はっきり言って開成町の場合、特産品というものがあまりないというところで苦慮していて、弥一芋とか、その辺の農家さんの頑張りで、今、ブランド化はしていますけれども、もともとは水田地帯で、いわゆる米どころというところで、PRするところは極端な話、米なのかなというところを考えると、米をテーマにしたそういうイベント的なところは良いヒントかなとは思いますが。今後、また、その辺は、ブランドに苦慮している町としては、米だけに頼ることはできませんけれども、その辺は着実に進めていきたいと考えてございます。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

ぜひとも、これ、特産品をつくるのだ、つくるのだではなくて、まずは今あるものに光を当てる。光を当てるのにはどうしたら良いかというところに一旦、戻ってみると、いろいろなヒントは出てくると思うのです。いろいろなものをつくっていかなくてはいけないではなくて、その米をベースに、早い話が、これはもう実績として新横浜でグルメタワーというもののの中で提供されているという。決してお肉が特産ではない、野菜が特産ではない、米なのです。それでコンセプトが生まれてくるという。その中の仲間入りができるという。それを、例えば、開成町の飲食店組合の中で開成町のお米を使ってくださいよということになれば、それが一種のグルメタワーというの

か、グルメ街になるのですか。

それは、言い方はいろいろとあるのですが、やはり、そういうので町の活性化はできるはずなのです。それは行政サイドだけで考えるのではなくて、いろいろな人のアイデアを集結した中で活用されていっていただきたいなと思いますので。これは、そういう機運が上がってくれば協力しますよという面もあるので、単なる「言ったから、行政、やりなさいよ」ではなくて、我々もできることは協力していきますので、ぜひとも、そういう場を、町総ぐるみの中で町の活性化を図っていくのだという観点の中で仕掛けをしていっていただきたいと思います。

それと、これは今後の課題だと思うので、再質問の中で、質問は変わりますけれども、福祉・防犯・防災事業を内容に盛り込んだイベントの構築をとということで質問をさせていただきました。ある程度の答弁が返ってきました。いろいろな見方があると思うのですが、福祉・防犯・防災事業をイベントの事業としてやるというパターンもあれば、イベントの中の開催の一部の中で、防犯というものをどう見るのか、福祉をどう見るのか、防災をどうアピールしていくのかという、いろいろな見方があるのですけれども。基本的には、今後については、イベント開催についてはこの3点、福祉、防犯、防災というフレーズを使った中でイベントをやっていかなければいけないのではないのかなと考えているところで、これは産業振興課ではなくて環境防災関連になるのかなとも感じるころなのですが。

この間の日曜日、町防災訓練が大々的というか、雨で若干、終止符は打たれましたけれども、開催がされております。これを1年の1回の行事として見るものなのか、三大イベントのお祭りの中に常に防犯、防災、福祉を意識した中でお祭りを開催するかによっては、周知度が物すごく変わってくると思うのです。先ほど、同僚議員が一般質問をした中に環境フェアというものがあったと思います。これを1回のイベントでどんと打っていくやり方をするのか、今現在ある中のイベントの中でブースを一つ設けて啓発をしながらイベントを仕掛けていくのかによって、これは捉え方が変わってくると思うのです。

現在あるイベントにお客さんが来てくれています。そのお客さんに対して周知する方法なのか、環境フェアというイベントをつくって人を呼んで教えるというパターンなのかによっては、これはえらい能力が変わってくると思うのです。本当に真剣に福祉、防犯、防災を考えているのであれば、イベントに打って出て開成町はこうなのだよという。

例えば、災害でいえば、今現在、イベントをやっている最中に堤防が切れました。こういうときには、皆さん、こうやって避難してくださいよとか、それでも一種の防災という部分にはひっかかってくると思うのですが。イベントの内容の中にそういう3要素、福祉、防犯、防災も含めた中で開催していくべきではないのかなと提案するのですが、その点についてはどのようにお考えか、お聞かせください。

○議長（茅沼隆文）

産業振興課長。

○産業振興課長（遠藤孝一）

イベントの中に福祉、防犯、防災のことを盛り込むというお話でございます。答弁の中にもありましたとおり、現状としては、実際、お祭りの中でやっているというのが現状で、例えば、あじさいまつりに関しては手話通訳をつけたりとか、そういうことは以前やっていなかったことをやったとか、やっていますけれども、御指摘のとおり、防犯だけのお祭りとか福祉だけのお祭りとかはなかなか難しいと思います。阿波おどりのときなどは福祉席を設けたりということで、障がいのある方に対して配慮はしていると。ひなまつりのときには、ああいうところで段差があるところなので、車椅子の方等には、なかなか見学はできない場所ですけれども、それなりに配慮は行っている状況でございます。

これを取り入れて町の色を出すところまではなかなかできていませんけれども、今、昨今、今年に限っては特に台風等が来ている中で、イベント時のそういう対応だとか、あじさいまつりのときなどについては、かなりAEDを持って安全サポーターやら赤十字の皆さんに回っていただいたりしています。実際のところ、具体的にAEDを使って処理をした事例はございませんけれども、あじさいまつり期間中に1回ぐらいは救急車を呼ぶ事案は起こっています。そういうときの対応が例えば徹底されていれば、町の色として、開成町のお祭りに行ったら、これだけ迅速な対応をしたという実例を残せればと思いますので、その辺を含めた中で、今後、お祭りの企画を考えていったら良いのかなと思います。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

分かりました。

それと、あと、お祭りのときに災害緊急時に対応する体制の発信はされているのか。事故等を含むということで、当然、開成町民は、この町にいますので、実際問題、どういう行動をとるかとか、どこの自分がいるのかというのは把握しているのですが、何万人というお客さんを呼ぶということは、その人の生命も守らなくてはならない宿命というのですか、責任というのがあると思うのですけれども、そこら辺の体制の発信をちゃんとされているのか。そこには二次被害の軽減という部分も含めた中で、安全、衛生、危機管理の徹底をしていかななくてはならないのですが、そこら辺の発信をやられているのかどうか。

現状で見る限りは、やっていないのかなと思いますので、そこら辺は、危機管理をとるという部分では町だけの問題ではなくて。我々も外に出たときに、そこら辺が不安になってくるので、小さな町、開成町だからこそ、そこまで徹底しているのだよという位置づけは発信できると思うのです。それには、先ほど、提案したように、祭りの中の一つのブースに、そういうブースがあっても良いと思うのです。何かあったときには、そこに駆け込む。例えば、救急車の手配でも、いろいろな困ることが出てく

と思うのです。

そういう位置づけの中で、そのブースを普段の、例えば、オレオレ詐欺が物すごく出ているときには、そこでそういう啓発をしても良いと思うのです。決して、あじさいまつりだから、ひなまつりだから、だめですよというのはないと思うので、より人に周知されることによって、それは意義があると思うので、そこら辺の対応の体制の発信が現況でどうなっているのかというのも、あわせてお聞きしたいのですが。よろしくをお願いします。

○議長（茅沼隆文）

産業振興課長。

○産業振興課長（遠藤孝一）

議員御指摘のとおり、具体的に、お祭りのときに緊急災害的なメールの発信みたいなことは実際はしていません。町としては防災のほうで、こういう事件があったとか、そういうことはメールで出しているところなのですけれども、そういうことはお祭りとして、例えば、本部がそれを受け持つとか、そういうことは対応できていないというのが現状でございます。

今、案としてありましたブースを設けるとか、その辺は、かなり手狭なところでやっているとあるので、なかなか場所の確保が難しいというところはございますけれども、そのような提案は参考にさせていただきたいと思います。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

ぜひとも、今後については体制をとっていただきたいという。

また、救急車の問題については、自分なりにもいろいろな考え方がありますので、イベント側に行けば良いのか、町長のほうに行けば良いのか、分からないですけれども、また提案をさせてもらおうと思いますので、質問以外で、そのときはよろしくお願いします。

それでは、あと、自分なりに企画、提案したいのがいくつかあるのですが、先ほどの環境防災フェアの件で、高断熱住宅、ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス、ZEHをテーマにした中でのイベントの開催をということで、前田議員のときにそこら辺を触れられたと思います。効果としては、温室効果ガスの排出削減、災害時の電力自給に役立つ、室内の寒暖差が小さくヒートショックを防ぐことにより疾患や脳卒中などの予防につながると言われており、政府でも2020年までにはハウスメーカー等の新築注文戸建て住宅の過半数をZEHにするという方針を打ち出している中で、おもしろい研究データがあったのです。

これは、今、環境と防災という切り口の中で述べさせていただいたのですが、ZEHを進めることによって健康寿命を4年延ばすという研究結果もあるということが公表されております。一概に、環境防災フェアだからここでやるのだではなくて、

そこの裏側に健康寿命を4年延ばすのだよという健康データも出てくるということは、福祉の部分でもアピールができるという部分では、所管課だけがやるのではなくて、いろいろな課がまじった中でイベントを成功に導いていくという、ある意味、誘導していくという部分では有効ではないのかなと思いますので、ぜひ、そこら辺は、まちづくりのほうだけではなくて、そこら辺の観点も踏まえた中で、「いや、気密性の良い住宅を建て……4年、長く健康で生きられるのですよ」というのも一つのキャッチフレーズとして売り込むことができますので、そこら辺は今後、研究していただきたいと思います。

あと、もう一点、町防災訓練、地域防災訓練になかなか参加できないお子さんや障がいを持つ方たちが、楽しくゲームを通じて防災を学べるシミュレーションゲームを取り入れたイベントの開催をということで、これは、小田原市消防には職員で構成する小田原市消防職員協議会があるのですが、その協議会で防災ゲームを考案、製作されました。このたびの質問の前には役場職員に情報として提供していますが、防災ゲームを理解されたのか、まだ聞いていないよというのか、そこら辺、一つ質問したいと思います。

○議長（茅沼隆文）

危機管理担当課長。

○危機管理担当課長（橋本健一郎）

では、お答えしたいと思います。

今の防災シミュレーションゲームということで、そちらは小田原市消防本部の職員が実際にやっていらっしゃるということで、確認はさせていただいたところでございます。そういった確認をしたところでは、業務というよりは個人的な、そういうボランティア的なところでの活動をされているところは確認をしているところでございます。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

内容について確認していただいたのかということと、今後については、そういうゲームを、防災ゲームを通じた中で、先般、行われた町防災訓練、そこら辺に取り入れるのに有効ではないのかなと自分は思っているのですけれども、そこら辺、研究、検討する価値があるのかどうか。

これ、一つ事例を言わせてもらおうと、11月18日に開成町福祉会館で、特定非営利活動法人防災総合ペット育成協会、BSP主催で、開成町教育委員会、小田原市教育委員会後援で、「君とずっと一緒にいたいから」の絵本出版記念コンサートの本式典会場で参加型のこの防災ゲームを披露します。今、一応、その予定で進めていっているのですが、これは、どちらかというと行政側ではないですね。民のほうが生声を上げて、こういうのを広めていこうではないかということでやろうとしている事例ですが、そういうもの、良いなというものはすぐ取り入れて、楽しみながらと言ったら

いけないですよ、町の防災訓練というのは真剣といえば真剣なものだから、そんな安易なイベントとして捉えてはいけないというのは認識しているのですが、しかしながら、やはり参加してくれなければ防災訓練も訓練のうちに入らないので、人を呼ぶという意味で、参加を増やすという意味では、そういう防災ゲームというのも有効になると自分は思っていますので。そこら辺、どういうやりとりをしたのかは、もうちょっと詳しく答弁が欲しいのですけれども、やる意義があると思っているのですが、その点、どうでしょうか。

○議長（茅沼隆文）

町長。

○町長（府川裕一）

先ほどの防災の関係で、大きなイベントのときに災害があった場合、外から来るお客さんの対応もきちんと考えていく必要があるのかなという、改めて認識をしましたし、今、防災のゲームはほかにも様々ありまして、防災リーダーの研修会の中に取り入れたり、各地区に行って、きめ細かく、そういうことをゲームをしながら防災について関心を高めていただくツールはたくさんありますので。今、また新たに山田議員からそういう提案をいただきましたので、そういうのをいろいろ検証しながら取り入れていきたいと考えております。

○議長（茅沼隆文）

山田議員。

○2番（山田貴弘）

最後に一言、言わせていただきます。前例にとらわれイベントをこなすのではなく、前例をつくるような仕掛け、企画の提案をされることをお願いして質問を終わりにします。ありがとうございます。

○議長（茅沼隆文）

山田議員の一般質問を終わります。お疲れさま。